

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	岡村幸代
2. 審査委員	主査：(岡山大学 教授) 西山 修 副主査：(鳴門教育大学 教授) 田村 隆宏 委員：(兵庫教育大学 教授) 名須川知子 委員：(岡山大学 教授) 吉利 宗久 委員：(岡山大学 教授) 片山 美香
3. 論文題目	子育て意識の変容過程に基づく母親支援の実践開発
4. 審査結果の要旨	<p>先端課題実践開発専攻先端課題実践開発連合講座 岡村幸代 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：令和2年2月11日（火）13時30分～14時00分</p> <p>場所：岡山大学教育学部東棟3階1308室</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>第1章 研究の範囲と位置付け</p> <p>第1節 研究の背景と問題の所在</p> <p>第2節 用語の統一と倫理的配慮</p> <p>第3節 研究目的と内容構成</p> <p>第2章 子育て支援講座に参加した母親の子育て意識の変容</p> <p>第1節 子育て支援講座に参加した母親の参加初期における子育て意識の変容過程</p> <p>第2節 子育て支援講座に長期間参加した母親の子育て意識の変容過程</p> <p>第3節 子育て支援講座に参加した母親の心理的変容に関わる語りの特徴</p> <p>第3章 母親の子育て意識の変容過程に基づく子育て支援プログラムの実践開発</p> <p>第1節 子育て支援における絵本の読み聞かせが母親に与える心理的効果</p> <p>第2節 母親の子育て意識の変容過程に基づく子育て支援プログラムの開発</p> <p>第3節 母親の子育て意識の変容過程に基づく子育て支援プログラムの実施と評価</p> <p>第4章 研究の総括と今後の展望</p> <p>第1節 子育て支援講座に参加した母親の子育て意識の変容過程と支援の意義</p> <p>第2節 支援プログラムの開発と子育て意識の変容過程</p> <p>第3節 今後の課題と展望</p> <p>引用文献 資料</p>

地域社会の繋がり希薄化や母親の孤立等、子育てに関わる困難な状態が続いている今、具体的な取組の手順やモデルの共有、支援の質的向上と量的拡充の推進が望まれている。これまでに、母親への支援の実践自体は豊富にあるが、それらの効果に対し十分な調査や分析はなされていない。分析を踏まえた実証的かつ実践的な支援プログラムを開発し、支援の強化に繋げることは喫緊の課題である。そこで本研究では、公民館における子育て支援講座（以下、講座）に継続的に参加した母親の語りについて、量的分析及び質的分析を行い、母親の心理的変容の特徴に基づく効果的な支援方法の端緒を得るとともに、講座での絵本の読み聞かせ（以下、読み聞かせ）に着目し、活動前後の母親の気分や感情の変化を量的分析により実証する。それらを踏まえ、読み聞かせを援用した子育て意識の変容を促進する支援プログラムを開発し検証する。その際、育児に対する自己効力感の向上等を、統制群との比較による検討、及び母親の個人差による効果の違いに注目して詳細に検討する。また、支援プログラムを介した母親の心理的変容の過程を提示する。

本研究全体は、4章構成である。第1章は先ず、研究の背景を述べ、読み聞かせ活動と内外の支援プログラムに関わる先行研究の今日的な課題を示した。次に、本研究全体に関わる倫理的配慮について記した。さらに、本研究の全体像と母親の子育て意識の変容及び読み聞かせ活動と関連要因との関係を示した。本研究では、講座に参加した母親の子育て意識の変容として、育児に対する自己効力感の向上と読み聞かせ活動に着目した。母親が読み聞かせやワークに取り組み、子育て意識の変容を促進する支援プログラムを開発し試行するという、本研究の全体構成を説明した。

第2章は、講座に継続参加した母親の子育て意識の変容に着目した。併せて、子育て意識の変容過程の促進の要因を明らかにし、支援プログラム実施の具体的な手立てを考察した。第1節では、講座の参加初期における母親の子育て意識の変容過程を質的分析（複線径路・等至性モデル）により分析した。これにより、母親の子育て意識が4段階を経て変容することが示され、母親自身の講座における体験の類型の存在が実証された。第2節では、講座に長期間参加した母親の子育て意識の変容過程を複線径路・等至性モデルにより分析し、支援の実践に際して、母親の成長に促進的な働き掛けが出来る手立てを考察した。第3節では、講座に参加した母親の心理的変容に関わる語りの特徴について量的分析（テキストマイニング、階層的クラスタ分析）を試みた。分析の結果、母親の心理的変容の時期や、変容に繋がる要因が明らかになり、支援の実践に向け手掛かりを得た。

第3章は、母親の子育て意識の変容過程に基づく支援プログラムを開発した。先ず、読み聞かせの母親に対する心理的効果を実証した。次に、認知行動論的技法を援用した支援プログラムを公民館の講座として開発及び実施し、評価を行った。具体的には、第1節では、講座での読み聞かせが参加者としての母親に与える心理的効果を明らかにした。活動への参加を通して、母親のイメージ及び気分・感情の改善があることが実証された。第3節では、第2節で開発した支援プログラムの効果を統制群との比較において検証した。具体的には先ず、Ward法による階層的クラスタ分析を用い、母親の類型化を試みた。その結果、2つの類型（上昇群、維持・下降群）が見出された。次に類型と諸変数との関係を検討した結果、上昇群の母親に育児に対する自己効力感の向上が認められ第4回講座終了1か月後においてもその効果を維持出来ることが明示された。

第4章は、第1章から第3章までの研究成果を整理し考察を加えるとともに、研究の到達点、今後の課題、及び今後の展望を提示した。第1節では、母親が他者に支えられながら講座への参加を継続する段階における支援に関して、子育てネットワークのエンパワーメントの過程や、家族療法における円環的な視点を援用し整理した。第2節では、支援プログラムの実施が子育て意識の変容過程に与える効果を検討した。具体的には先ず、第2章と第3章の結果を対応させ、支援プログラムにおける母親の子育て意識の変容を可視化しその内容を検証した。次に、得られた検証結果から母親の子育て意識の変容のモデル図を提示した。第3節では、本研究で得られたその他の成果を整理した。さらに、本研究の今後の課題を示した上で、展望を論じた。

2. 審査経過

本論文の主要部分は、3編の査読付き学術論文として、全国学会誌である『読書科学』（第一著者、日本読書学会誌2013）、『家庭教育研究』（単著、日本家庭教育学会誌2016）、及び同誌（第一筆者、日本家庭教育学会誌2018）に掲載されている。これらの研究成果と内容についての審査を踏まえ、5名の審査委員が留意して討議した諸点は、以下の通りである。

(1) 研究目的と論文構成の整合性について

本論文は、地域の子育て支援講座に参加した母親の心理的変容過程を明示するとともに、子育て支援プログラムを独自に開発し、具体的な支援の手立てを提供することを研究目的としている。論文構成は、本目的に沿って、先行研究の検討による課題の明確化及び母親の心理的変容過程の分析を踏まえ、支援プログラムの開発、実施、分析、考察の上で、心理的変容を促進する支援を論考する流れである。したがって、研究目的に整合する妥当な論文構成になっていると認められる。

(2) 先行研究の概観と考察に使用された資料の扱いについて

先行研究の概観では、「子育て支援」「絵本の読み聞かせ」に関わる学術的研究、及び実践的研究の展開を時系列に沿って丁寧に考察している。また、近接領域や国内外の文献を十分に網羅している。支援プログラムの作成等に使用した資料等にも、引用に十分留意して取り扱っている。倫理的配慮も問題ない。よって、研究資料の質・量、扱い方ともに学位論文の水準にあると判断できる。

(3) 分析と考察における客観性及び論理的な文章表現について

分析と考察においては総じて、主観的恣意的な記述を排除し、科学的な解釈や論理的な文章表現への配慮が認められる。分析では適宜、分散分析、因子分析、Ward法による階層的クラスタ分析、及び質的分析を行い、客観的な分析に努め、研究の再現性、妥当性、信頼性を高めている。また考察では、先行研究や関連領域の知見を十分踏まえながら、深い論考が行われている。論の運び方は明快であり、得られた結果から、納得がいく合理的な結論を導くことができている。

(4) 教育実践学の学位論文としての独創性及び発展性について

地域の子育て支援における母親支援の実践開発は喫緊の課題であるが、実証的研究及びそれに基づく実践開発は十分とは言い難い。本論文は、子育て支援講座に参加した母親の子育て意識の変容過程を明示した上で、絵本の読み聞かせを援用した育児に対する自己効力感等の向上の可能性が高い支援プログラムを開発した。また、支援プログラムに参加した母親の心理的変容のモデルを提示している。よって教育実践学の観点からも独創性に長けており、今後の発展が期待できる。

(5) 学位に学校教育学を付記する根拠としての学校教育実践への貢献について

地域の子育て支援は限られた資源の中で行われている。本論文は、これに資する独自の支援プログラムを提供し、支援機関や支援者に対し、身近な絵本の読み聞かせを用いた具体的な実践モデルを提示する。また幼稚園教諭等の力量形成に資することも期待できる。さらに子育て支援講座に参加した母親の心理的変容が明示されたことで、実践を向上し得る知見を提示している。以上により本論文は、学校教育実践へ貢献する成果が認められ、学校教育学の発展に寄与する論文と言える。

3. 審査結果

以上により本審査委員会は、岡村幸代の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。